

## パラリンピック選手、横田で合宿 *Yokota hosts Paralympic athletes*

August 20, 2021

By Airman 1st Class Tyrone Thomas  
374th Airlift Wing Public Affairs

東京2020夏季パラリンピック競技大会への出場に先立ち、第374空輸航空団は、8月11日から21日までの期間、約70名の選手の合宿を受け入れている。

この期間に、選手たちは日本の気候や天候に体を慣らすとともに、時差を調整した。

アメリカ代表チームの短距離走および走り幅跳びのジャリーン・ロバーツ選手は、「この合宿期間は、私たちにとって多少優位に働く」と語り、「時差ぼけや天候はパフォーマンスに大きく影響する。パラリンピック選手村に入る前に同調できる機会を得られたことに心から感謝している」とコメントした。

オリンピック委員会は(昨年)、COVID-19の問題と公共の安全のために東京オリンピックおよびパラリンピックの延期を決定した。

アメリカ代表チーム競泳のマッケンジー・コアン選手は、「昨年、朝起きるとコーチから大会延期決定を知らせるメールが入り、一瞬息ができない思いだった」「しかし、これまでの人生で経験してきたあらゆる逆境を思い返して、心を開いて臨むことにした。1年間ハードなトレーニングを続けてきて、より強くなれた」と語った。

選手の到着を待つあいだ、横田基地のメンバーはいつでもアメリカチームを迎えられるよう、サポートする態勢を整えていた。

第374施設中隊監督官のチャールズ・パターソン・ジュニア上曹長は、「2019年から2020年の初めには、ほぼすべての準備が整っていた」「ようやく(選手たちが)基地に来てトレーニングを始めることができ、血と汗と涙を流してきたすべての人々の献身的な準備の成果をようやく目の当たりにできることにほっとしている。沢山の人が、ついにこの日を迎えたことに興奮している」と語った。

横田基地には50mの温水プールがあるため、当初は競泳チームをサポートすることだけを予定していた。しかし、新型コロナウイルス感染症の規制と予防対策が強化されたことで、陸上チームのサポートも引き受けた。選手たちは基地の人々との接触を制限しなければならなかったが、陸上や競泳の練習(の一部)を公開することで、基地の住民に感謝の意を表した。

アメリカ代表チームの競泳ジャマール・ヒル選手は、「金曜日にここを離れるのは寂しい」「横田では、全てにおいてもてなされた。同郷が示してくれたのは、愛と感謝と敬意そのものだった。私たちはそのお返しにできる限りのことをしたいと思った」と語った。

軍施設でのトレーニングは、アメリカ代表チームに所属する21人の退役軍人のことをより深く理解する経験ともなった。槍投げジャスティン・ボンサヴァン選手は、「アメリカを最前線で守るためにまさに命をかけてきた退役軍人とチームメイトになることは、本当に凄いことだ」「ほとんどの人が見たり聞いたり経験したりすることのない世界の別の側面を学んで成長できる素晴らしい機会だ。また、彼らの人としての成長に関われることも素晴らしいことだ。退役軍人がいるチームの一員であることを嬉しく思う」と述べた。

また、基地内の映画館ではアメリカ代表選手たちによる質疑応答セッションが行われた。一人の若い参加者は、自らが視覚障害のある泳者であることを明かし、オリンピック選手になった気持ちを尋ねた。



アメリカ代表チームの陸上短距離ニコラス・メイヒュー選手は、「信じられないほどの名誉と達成感だ」「一歩下がってその現実を見ようとしても言葉にならない。人生をかけて何かに取り組んできて、ついに自分の名の横にその栄誉を手に入れることができた...最高の気分で、言葉にするのは難しい」と答えた。

横田での合宿期間も終わりに近づき、選手たちはいよいよ8月24日から始まる東京パラリンピックに向けて出発する。